

キャンパス通信 ippeki



- 01 学部長挨拶／  
皆さんの夢を支援します！
- 02 特集／  
Withコロナ  
みんなの安全を守るための大学生活
- 03 学部／  
「国際看護コース」の学生の活動
- 05 大学院
- 06 助産演習
- 07 地域貢献
- 09 教員紹介
- 10 ひとりを見る目、その目を世界へ

第21号  
2021.4 ▶ 2021.9

1年生科目「赤十字救護・援助法」の一コマ



ひとりを見る目、その目を世界へ

 日本赤十字九州国際看護大学  
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

# 皆さんの夢を支援します!

本学は創立21周年を迎え、多くの優秀な卒業生が国内外で活躍しています。在校生も看護の学習はもちろん、国内外のボランティア活動に熱心に取り組んでいます。近年では、平成28年4月の熊本地震を機に設立された学生災害支援委員会を中心に、現在も活動を継続しています。

看護は「苦しんでいる人を助けたい」という人間愛に基づいています。この人間愛は赤十字の基本理念である「人道」と共通しています。社会の変化に伴って看護への期待が高まり、活躍の場も医療施設・地域社会・国際社会と多岐にわたります。

一方、厳しい面もあります。昨年から世界中に拡大している新型コロナウイルス感染症(COVID-19)患者に対し、看護師は患者の最も近いところで専門職としての責務を果たしています。その活躍には、これまでに培ってきた専門知識が活かされ、看護の技術が駆使されていますが、同時に今回の感染症拡大から得られつつあるエビデンス(科学的根拠)に基づき、看護としての新たな対策を講じていくことも必要となり、この感染症への対応を機に、より安全で健康な社会の構築に向かって力を発揮していくことになります。

看護師には、これまで以上にグローバルな視点を基にした、専門職としての広い視野と深い知識、より高度の技術が必要とされるようになっていきます。疾患対策の知識・技術とともに、社会の変化に対応するための柔軟な思考力や、苦しさを抱える人々に寄り添う人間力もますます重要となります。

本学で学ぶ意味は、グローバルな視野や教養に裏打ちされた高度な看護実践力の基礎を身につけることができること、そして専門職として生涯を通して成長していくための思考力や人間力を培うことができることです。

私たちは、皆さんが夢や目標に向かって着実に進んでいけるよう全力で支援します。

そのために教職員も研鑽に励み、大学全体で教育の質向上に取り組んでいます。

学部長 中村 光江



## 教職員対象 前期学内研修 教員も職員も 学びを止めない!

本学は、全国の看護大学で唯一、文部科学省の補助事業である大学教育再生加速プログラム(AP事業)「高大接続改革推進事業」テーマV「卒業時における質保証の取組みの強化」に採択され、4年間の取組みを経た昨年度、日本学術振興会同プログラム委員会で開催された事後評価で、最高レベルのS評価を得ました。

教育研究をはじめとする大学の活動にも、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける日々ですが、AP事業での実績を途絶えさせることなく、ピンチをチャンスに転換できるよう教職員もさまざまな研修でパワーアップを図っています。

### 2021年度前期 教職員対象学内研修 テーマ・講師一覧

6月10日 「科研費獲得による研究活動について」

福岡大学医学部看護学科 教授 久木原 博子先生

7月15日 「大学教職員の質向上のための研修:赤十字の基本理念に対する理解」

本学国際看護実践研究センター長兼地域連携・教育センター長 伊藤 明子先生

8月30日 「カリキュラムに関する研修」

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 講師 竹中 喜一先生

8月26日 「奨励研究発表会・新任教員発表会」

本学 リベラルアーツ・専門基礎領域 教授 中山 晃志先生

ヘルスプロモーション・在宅看護領域 助教 鎌田 ゆき先生

看護の基盤領域 助教 高堂 香菜子先生

メンタルヘルス領域 助教 高瀬 理恵子先生

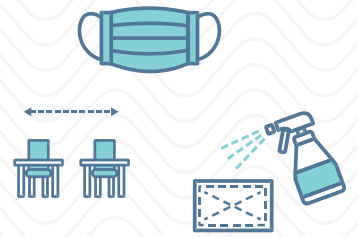


特集



# Withコロナ

## みんなの安全を守るための大学生活



新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の発生は、2019年12月に始まり、世界中へと広がりました。

2020年度は、オンライン授業が中心となり入学したばかりの1年生は、大学に入構できない状態で、大学生活が始まりました。友達とも会うこともできない生活でしたが、2021年度は、いよいよ全学年が登校し、面接授業が開始されました。



### 黙食の徹底、ランチタイムの感染対策

久しぶりに大切な友達に会うと、ついつい盛り上がってしまいます。楽しいランチタイムではありますが、感染コントロールのため守るべきこととして、黙食と十分な換気のもと学生同士の距離を取り食事することを徹底しています。会話を楽しむ学生のもとに、黙食ポスターを持った教員が、学生のもとに静かに近寄ると、学生たちは、黙食の重要性を意識し、黙食を徹底したランチタイムを過ごしています。



### 自分の健康状態を管理する。

健康管理表あるいは健康日誌アプリに、1日3回の体温と新型コロナウイルス感染症の症状の有無をチェックし、症状が一つでもある場合は、大学の保健室に報告するようにしました。学生たちは毎日自分自身の健康状態を、観察することでいち早く自分の変化に気づき適切な行動をとることができています。学生の健康相談は、保健室職員と学生支援委員会・COVID-19対策本部の教員が携帯電話を持ち24時間体制で学生をサポートしています。



### 新型コロナウイルスに対する学習会 合言葉は3つのmy!



4月のガイダンスでは、教員より感染管理に関する講義を受け、「手指消毒剤・除菌シート・体温計を携帯しよう」と提案を行いました。手指消毒剤や除菌シートはすでに携帯しているものではありますが、これに体温計を加え、体調の不調時にすぐに自身で体温測定ができる準備をしました。「my手指消毒・my除菌シート・my体温計」合言葉は、3つのmy!

5月には、学年担任の企画で、学年別に新型コロナウイルスの勉強会をしました。昨年度は、学校医による講演を受けていますので、今回は、講義に加えグループワークを取り入れ、自分たちで対策を考えるという研修会としました。学生からは、「気持ちが一層緩んできていたが、もう一度気持ちを引き締めようと思った」「看護以外の友人から、遊びに行こうと誘われ悩むこともあったが、今日学んだことを伝えることも看護を学んでいる自分の役割だと思った」などの感想が聞かれました。

### 大学に登校し学習を継続するために(国家試験受験対策)



学生の組織である国家試験受験対策委員会が中心となり、国家試験対策のための補講や学習会、模擬試験などを運営しています。感染者が急増した8月に、4年生は国家試験の模擬試験を計画していました。学生たちは、在宅での受験も検討しましたが、会場での緊張感を体験するため登校での受験を選択しました。感染防止対策を徹底するために、入室時の健康状態確認や体温測定を実施しました。試験中の教室の換気にも気を配りながら無事に模擬試験を実施することができました。



# 「国際看護コース」の学生の活動

新型コロナウイルス感染症の影響により、海外研修が見合わせとなっている中、「国際看護コース」の学生たちは、身近なところから取り組みを始めたようです。学生のレポートをお届けします。

私たち国際看護コースは前期の授業科目において、在学生への感染拡大の防止啓発活動と大学見学できない高校生、国際交流提携大学の学生を対象にした大学紹介動画を日本語と英語で作成しています。また、宗像市が提案する「大学生とつくる元気なまちプロジェクト」にも応募しました。コロナ禍において人々の運動不足やストレスの蓄積は体力や免疫力の低下を引き起こし、健康に影響を及ぼすのではないかと考え、これまで学習してきた知識を活用し、本学のある宗像市の市民の方々が自然豊かな宗像市の景色や風景に「感動」しながら、運動不足・ストレスを解消する運動やリラックス方法を、「do」自行動を起こし、元気で健康なMunakaterになってもらいたいという思いで『看do(カンドー) munakater Project』とネーミングしました。私たちの提案は採択され、現在3つの取り組みを行っています。

1つ目は散歩コースの作成です。私たちは本学の周辺の美しい自然を生かしたお散歩コースを作り、写真がきれいに撮れる映えスポット、休憩スポット、ストレッチスポットをコースに取り入れ、様々な世代のニーズに添えるよう努めています。

2つ目はストレッチの考案です。ストレッチをすることで、コロナ禍でもストレスなく健康で生き生きとした生活を送ってもらうことを目標としています。ストレッチは、散歩の前後に身体をスムーズに動かすためや怪我予防のためのストレッチ、そして運動不足や疲労・ストレスを解消できる自宅で行えるストレッチの2つを準備しています。

3つ目は宗像市の特産品を使ったオリジナルレシピの考案です。宗像市で獲れる特産品を活かしたレシピは既にあります。私たちは看護学生として、健康面や看護の視点を意識したレシピを考えています。美味しく簡単に健康へのお手伝いができることを目標に今も準備に力を入れています。

これらの活動を通して、赤十字の人道理念である「生命と健康を守り、人間の尊重を確保する」ために、看護学生だからこそできることに気付き、実践できていると実感しています。本学の「ひとりを見る目 その目を世界へ」をモットーに、私たちは立ち止まることなく成長しつづけ、この経験をいつか世界での活動につなげられるように、活動に励みたいと思っています。

国際看護コース 3年 堀悠夏 福嶋実穂 金城梨乃 中西花誉 中島望乃



散歩コースの視察



宗像特産物を使用し考案したレシピの試作



Zoomで各班密にミーティング



青空の下第1回対面でのミーティング



## 学生生活調査結果

毎年、学生支援委員会が行っている学部生対象の学生生活調査が今年も行われました。

調査結果からは、授業形態の変更などコロナ禍にあっても意欲的に学習に取り組んでいる学生の様子分かりました。

特に、平日の自主学習の時間数は、いずれの学年でも昨年度と比較して増加しており、学生たちは、それぞれの生活の中で、工夫しながら事前・事後学修を進めているようです。

○調査期間 2021年7月5日～9日(回収率が低くその後16日まで延長)

○回答率

	1年生	2年生	3年生	4年生
	83%	58%	53%	33%



### 1. 授業形態の変更(面接授業やオンライン講義など)がありますが学習意欲はありますか

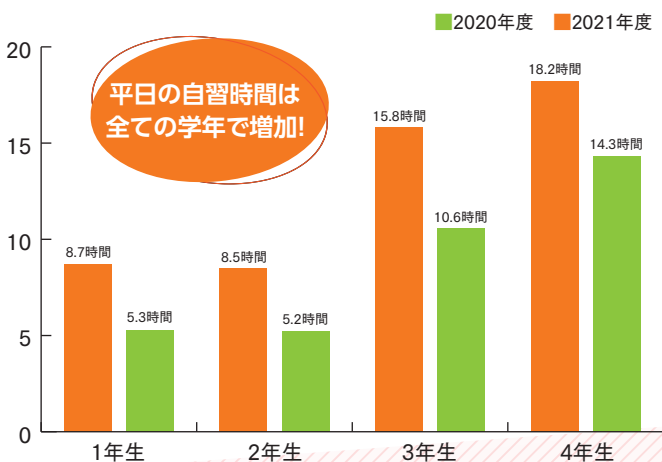
	1年生	2年生	3年生	4年生
とてもある	23%	10%	17%	6%
ある	73%	80%	70%	82%
あまりない	4%	8%	13%	9%
全くない	0%	2%	0%	3%

### 2. 授業形態の変更(面接授業やオンライン講義など)がありますが学業への専念は出来ていますか

	1年生	2年生	3年生	4年生
とてもある	15%	10%	17%	6%
ある	78%	84%	67%	76%
あまりない	7%	5%	13%	15%
全くない	0%	1%	3%	3%

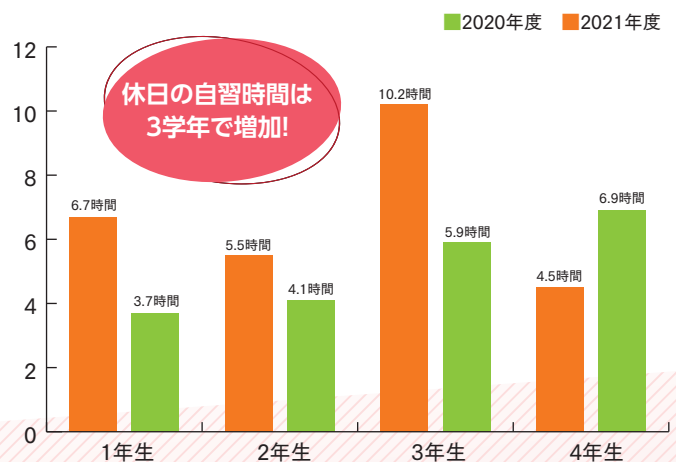
### 3. 平日に授業時間以外の学習を何時間していますか

平均時間	1年生	2年生	3年生	4年生
2021年度	8.7時間	8.5時間	15.8時間	18.2時間
2020年度	5.3時間	5.2時間	10.6時間	14.3時間



### 4. 土日祝に授業時間以外の学習を何時間していますか

平均時間	1年生	2年生	3年生	4年生
2021年度	6.7時間	5.5時間	10.2時間	4.5時間
2020年度	3.7時間	4.1時間	5.9時間	6.9時間



# 皆さんの大きな一歩を 全力で支援いたします。

## 研究科長より挨拶

本学は、2007年に大学院修士課程を開設し、2009年には助産教育コースを、2018年には高度実践看護師課程（専門看護師コース）を新設しました。博士課程は、2016年に5つの赤十字看護大学が共同教育課程として開設し、博士課程を有する稀少な単科大学となりました。

修士課程は、学部からの進学や社会人入学など様々なバックグラウンドの大学院生たちが、それぞれのキャリアデザインや夢の実現に向けて切磋琢磨しています。理論との統合により看護実践の知を確かなものとし、看護学や看護実践の場に貢献できる研究成果の創出を目指しています。このプロセスでは、専門分野ごとの指導に加え、他領域の専門的視点に基づいた指導も得られる等、研究が深化するための総合研究指導体制をとっています。また、職業と学業の両立を可能にするために、人的・物的環境調整を行い、大学院生個々の状況に即した指導・支援に努めています。来年度は、老人看護と精神看護の専門看護師（CNS）コースを開設するために準備を進めています。

博士課程は、看護学や社会の発展に寄与する高度な研究能力の獲得やアドバンスな学問の探究を志す大学院生が集っています。5大学の教授陣による遠隔講義、演習、研究指導は、TV会議システムやスマート会議システムを活用していますので、出席可能な場所で受講することができます。多様な専門性や豊富な研究指導経験を有する教授陣から指導を受けられることも魅力の1つです。

人口の高齢化のみならず、科学の発展やAIの開発などの技術革新は目覚ましく、社会は複雑かつ多様化しています。Covid-19感染症拡大などニューノーマル時代の到来により、保健・医療・福祉にも大きな変革が求められています。一方で、不易流行の精神も重要となります。このような時勢にこそ柔軟に創造的に対応できるケアシステムの検討や看護の強みの再発見、実践知に貢献できる研究等に挑戦してみませんか？

皆さんの大きな一歩を全力で支援いたします。

研究科長 姫野 稔子



## 上田奨学金献花式・ 奨学生修士論文進捗報告会

本学正面玄関のロータリーには、上田米蔵翁の胸像が置かれています。

上田米蔵翁は、1958（昭和33）年、本学の前身である福岡赤十字高等看護学院（後の福岡赤十字看護専門学校）の創設時に多額のご芳志をご寄贈くださいました。1968（昭和43）年には上田奨学会が設立され、福岡の赤十字看護師養成にご尽力いただきました。現在では、本学大学院生を対象に、毎年奨学金が貸与されています。

毎年、米蔵翁のご偉功に敬意を表し、胸像前にて献花式を行っています。本年は7月6日、米蔵翁のご令孫である上田奨学会理事長 上田康蔵氏と同会常任理事を務める小松浩子学長が献花をしました。

献花式の後に行われた理事会では、昨年度の奨学生である大学院生3名が、修士論文の進捗状況を報告しました。理事長をはじめ、理事の方々から多数のご質問やご意見をいただき、それぞれの研究の意義や価値を確認する場となりました。





助産演習

## 家族みんなを幸せにできる助産師めざして

助産教育コース1年生5名は、7月下旬に学内で行われた日本周産期・新生児医学会公認の新生児蘇生法講習会を受講しました。私は現在、助産師になるために日々勉強しています。これまでの学習の中で、女性や新生児、その家族のケアについて考える機会はありませんでしたが、新生児と触れ合った経験がないため、分娩介助の練習の際に、出生後の新生児についてリアルなイメージを掴むことができていませんでした。しかし、この新生児蘇生講習会を受講することで、新生児の生きる力を手助けする方法を学び、母親と新生児を結びつけることができました。講習会は、まず初めにプレテストを受け、講義とシュミレーション後にポストテストを行うという流れでした。自身の知識を確認した後、実際に学ぶことができたので、より知識を吸収できたように思います。また、シュミレーションは「妊娠37週、推定体重3100g、弱い啼泣です」など事例が与えられたため、「この赤ちゃんにはどう対応したらいいのか?」と2人1組で考え、臨床での実践を見据えた思考の整理ができました。今回、新生児蘇生法について学んだことで全母子ともに把握する視点を持つことができ、助産師を目指す学生として成長できたのではないかと考えます。私は本学で多くの知識と技術を身につけ、母子はもちろん、その家族みんなを幸せにできるような助産師になりたいと考えています。



大学院修士課程 助産教育コース1年 泉 真尋

博士課程

## 「合同研究ゼミナール」を終えて

私は、がん看護専門看護師として臨床経験を重ねる中で、がん医療と看護に生じている変化や課題を研究によって可視化し、がん看護の発展に貢献したいと考え大学院で学んでいます。現在、自分が取り組む研究テーマについて、がん看護学の専門家である指導教員からのスーパーバイズを受けながら、研究計画を立案しています。後期に入り、日本赤十字学園が運営する5大学の教員や大学院生の方々から研究計画について示唆を頂き、意見交換を行う「合同研究ゼミナール」が行われました。本年度はコロナ禍の現状を鑑み、テレビ会議による開催でしたが、活発なディスカッションがなされ大変勉強になりました。プレゼンテーションはとても緊張しましたが、専門領域の垣根を超えた方々からの沢山の示唆を得て、研究計画を立案する上で不足している点や、曖昧な点に気づくことができました。また、研究に取り組む同志とのネットワークを築くことができ、学生同士励まし合いながら、日々、研究計画の洗練化を行っている状況です。臨床と大学院生活の両立は大変ではありますが、新たなことを学び、研究に打ち込むことができる現状にやりがいを感じています。

共同看護学専攻 博士課程 近藤 恵

NEWS!

## 精神看護・老年看護のCNSコースを新設します

高い専門性と優れた看護実践能力をもつ看護職者である高度実践看護師の一つ「専門看護師 (CNS: Certified Nurse Specialist)」の育成を目指すCNSコースを、令和4年度、新たに2コース開設します。本学では、既に、在宅看護及びクリティカルケア看護の2領域を開設していますが、これら既存のコースに加え、「精神看護学」及び「老年看護学」の領域を増設します。修士課程は、全体カリキュラムの見直しを終えて、令和4年度入学生から新たなカリキュラムが適用される予定です。



# コロナ禍での 社会貢献・地域貢献の取組み

大学には、新しい知識の創造と人材の育成を担う教育・研究機関であること、さらに地域活性化や発展を牽引する中核拠点としての役割である社会連携・社会貢献が使命として求められています。

コロナ禍でも、本学では、社会連携・社会貢献の方針に基づいて、必要な感染対策を講じながら、地域社会に向けた活動を続けています。

## 新型コロナワクチンの接種支援を行っています

2月から開始された医療従事者対象の優先接種、8月から開始された職域接種に係る業務支援として、福岡赤十字病院への接種支援のため約40名の教員を派遣しています。

また、宗像市の要請に基づき、宗像市民を対象としたワクチン接種会場に教員を派遣して、ワクチン接種後の経過観察の支援を行っています。6月から派遣を開始し、これまでに約50日間で延べ約80名の教員が協力しました。今後も、継続していきます。

市の担当者の方からは、「接種支援にあたる看護教員が着用しているユニフォームの赤十字マークを見るだけで、接種される市民の方も安心されているようです。」とのお言葉をいただいています。



## 公開講座等を通じて市民とのクロス(交流)を 続けています

地域連携・教育センターでは、市民の方や地域の専門職者を対象とした講座の企画や宗像市からの要請に応じたイベント協力を行っています。

8月、小学生の夏休みに合わせて宗像市内のさまざまな事業所が開催する体験イベント「2021夏の課外授業inむなかた」に協力し、「Tシャツに体の中を描いてみよう!」に市内の親子3組が参加され、面白くもためになる夏休みの思い出作りに貢献しました。

また、同センターが恒例で企画する公開講座“クロスカレッジ2021(全4回)”を、8月と9月の各1回開催しました。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により市民向けの講座の開催を見合わせていたため、約1年ぶりの開催となりました。

8月は「身体だけじゃない新型コロナウイルス感染症の影響」と題して、衛藤泰秀助教の話題提供のあと、感染症に係るメンタルヘルスの分野でご活躍されている福岡県臨床心理士会の矢永由里子先生にオンラインでご講演をいただきました。時機を得た内容に参加者の満足度も高く「感染症を正しく理解する重要性が分かった」といった感想が聞かれました。





9月には、市内の小学生の親子3組を対象に『Little看護師』体験講座を行いました。感染対策を十分に講じた中、教員の指導の下、車いす移送介助、包帯法、聴診器体験を行い、学部生4名もボランティアで協力しました。講座修了時には、参加した小学生に「Little看護師認定証」の授与式を行い、笑顔に包まれた、楽しい思い出のひとつとなりました。



## 高大連携として市内の高校生をお迎えしました

今夏、初の試みとなる東海大学付属福岡高等学校との高大連携事業「地域で学ぼう! One Day Challenge ～日本赤十字九州国際看護大学キャンパス体験プログラム～vol.1」を開催し、高校生34名、教員2名を、学内にお迎えしました。

Vol.1の内容は、本学の看護教員による講義「赤十字の活動・大学で看護を学ぶこと」とキャンパスツアーでした。参加者からは、「もっと看護に興味をもった」「将来は看護師になりたいと改めて思った」「進路を考える上で役に立った」等の感想をいただきました。今後も、内容をさらに充実させて開催していきたいと思います。



## 希望者へのワクチン接種が完了しました

先行接種対象となる医療従事者に、看護学生等も含まれるとの厚生労働省通知に基づき、福岡赤十字病院・日赤福岡県支部の協力の下、接種を希望する学生451名に対し、6月、7月の2回に分けて接種を行い、希望者全員のワクチン接種が完了しました(学生全体の接種率は91%)。

7月の最後の接種日には、学部生の代表者が、福岡赤十字病院のスタッフの方々へのお礼として学年ごとに作成したメッセージボードを、同院の石丸副院長に手渡し謝意を伝えました。





# 地域連携・教育センター長兼国際看護実践 研究センター長に伊藤 明子<sup>いとう あきこ</sup>先生が就任されました

本学には、社会連携・社会貢献の更なる発展および、周辺病院の医療従事者や卒業生に対する継続教育を目的とする『地域連携・教育センター』、国際社会に貢献できる人材育成および、国際組織との連携を通じて自己研鑽の機会提供を目的とする『国際看護実践研究センター』という2つのセンターを設置しています。2つのセンターの機能を強化するために、両センター長として、日赤名古屋第二病院の前副院長兼看護部長で豊かな国際経験をお持ちの伊藤明子先生が就任されました。

伊藤先生は第46回フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞されています。

(写真提供:日本赤十字社 2017年)



## 地域連携・教育センター でのひとコマ

公開講座  
「これであなたもLittle看護師!」より  
小学生Little看護師さんに包帯を  
巻いてもらっています。



## 国際救護活動で ご活躍中のひとコマ

赤十字国際委員会のHospital Project Managerとして  
アフガニスタンで入院中の患者さんとの一場面

写真提供:赤十字国際委員会 2014年

## センター長にインタビュー

### Q 小さい頃の夢を教えてください

A 幼稚園の頃は扁桃腺炎でよく病院に通っていました。その時に出会った看護師さんの優しい声とかかわりが幼心に漠然と看護師さんになりたいと思うきっかけでした。また小学生の時に学校の廊下に貼ってあった「アフリカの飢餓の子ども」のポスターを見て、漠然とこの子どもたちを助けることのできる人になれたらいいと思っていました。その後は、何故か「秘書」・「臨床心理士」にも憧れていましたね。夢とは違いますね。(笑)

### Q 本学にいられて半年が経ちましたが、印象をお聞かせ下さい。

A 3月までは医療・看護の最前線にいました。特にCOVID-19禍においては手探り状態から始まり、日々変化する国の医療体制方針に基づき、柔軟に全職員で対応していました。医療を取り巻く様々な社会的な誹謗中傷から患者さんやご家族、そして職員を守る。そして看護職員が患者さんやご家族の気持ちにより添う「一期一会の看護を大切に」提供できるように、副院長として看護部長として勤務していました。その際にも、看護学生をはじめとする臨地実習の受け入れは感染管理の徹底と教育をすることで受け入れを続けていました。

4月から本学に着任しましたが、教職員の方々がCOVID-19禍において、いかに看護学生の方々の学習環境を整え、誰一人取り残すことなく支援できる体制づくりにご尽力なさっているかを感じています。これは、臨地実習を受け入れていた医療施設では、想像もなかった教育の現場の厳しさと責任を強く感じる機会となりました。教職員が丸となって、きめ細やかな配慮と、変化するCOVID-19禍の情勢を予測しながらの対応など、びっくりすると同時に頭の下がる思いで日々過ごしています。

看護学生の方々は、COVID-19禍ということもあり、様々な制限などにより、孤独を感じるなどストレスフルな状況であると思います。人の命を守り、患者さんやご家族の気持ちに寄り添う看護職を目指すという目標のもと、感染拡大防止に対して、様々な制限をポジティブにとらえ、自律した行動がとれるように努力している、という印象がありますね。

### Q 数多くの国際救護活動をされた中で、最も印象に残っている出来事は何でしょうか。

A よく聞かれる質問ですが、国際救護活動のすべてが最も印象に残っています。出会った人々の一人ひとりの顔も一つひとつの場面も。私は紛争地域での活動が多いのですが、紛争地域での活動には、紛争による犠牲者の救護活動と紛争地域で発生した自然災害の被災者の救護があります。私が出会った人々は、暴力を伴う紛争がなければ、私たちと同じように、美味しい物をおなか一杯食べ、学校への制限なく通うことができ、将来の夢を描きながら生活できていたはず。その地域・国の人々は、私たちにとって当たり前の日常生活を、暴力を伴う紛争の恐怖や貧困による欠乏により、一人ひとり尊い命の安全が守られていません。しかしその状況下で、私は傷つき、尊い命を失う人々、そしてたくましく生きる人々の姿から多くのことを学ばせていただきました。

紛争地域・国に身を置き、そこで出会った人々の失われた命や生きる姿は、今でも私の心の中で生き続けています。

### Q 学生へのメッセージをお願いします。

A 本大学を選択し、入学なさった理由はお一人お一人違うと思います。しかしみなさんは日本赤十字九州国際看護大学の学生になられたのですから、赤十字について、国際について関心を持っていただきたいと思っています。すべての学生が私のように国内災害や国際の救護現場で活動することを目指していらっしゃるとは思っていません。COVID-19パンデミックはまさにグローバルヘルスの危機です。しかしその陰には、様々な国や地域での人道危機が起こっています。今まさに皆さんが学修した赤十字の理念である人道の危機なのです。本学のモットーである「ひとりを看る目、その目を世界へ」のように、そして「Think globally and Act locally」を体現しませんか?前の質問にもお答えしましたが、「もし自分が人道危機にさらされている人であったら、」と考えると、日々の生活を大切に、自分も含めた身近な人々を大切にしてほしいですね。気候変動、SDGsについて、自分たちができることを行動化した学生生活を過ごしてほしいですね。国際看護は海外だけで行なうものではなく、グローバルに考え、日本にいながら、福岡県、宗像市でも行えます。できることから始めてみませんか?

## 伊藤センター長の略歴

1980年4月～2002年3月 松江赤十字病院 手術室看護師、松江赤十字看護専門学校選任教師、同病院 看護師長として勤務  
2002年4月～2021年3月 日本赤十字社名古屋第二病院 国際医療救護部副部長兼看護副部長、副院長兼看護部長として勤務  
2009年3月 日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科修士修了

### ☆国内の災害活動

阪神淡路大震災時:赤十字救護班看護師長、東日本大震災時:石巻圏合同救護チーム本部のコーディネイトメンバー(約40日間)、熊本地震災害時:病院支援コーディネーター(約3週間)、として活動

### ☆国際救護活動

ベトナム・カンボジア難民救護、南スーダン紛争犠牲者救護、東ティモール紛争犠牲者救護、アフガニスタン紛争犠牲者救護、復興支援、スマトラ沖地震被災者救護、ケニア大統領選挙後暴動犠牲者救護、パキスタン北部地震被災者救護、ジャカルタ中部地震被災者救護、フィリピン南部台風被災者救護、ミャンマー戦闘犠牲者救護



ひとりを看む目、その目を世界へ

本学のスローガンである「ひとりを看む目、その目を世界へ」とはどのような意味を持つのか、学生ひとりひとりが考えるきっかけとなるコーナーです。

今号のテーマ

## 卒業生からのメッセージ ~病院で働いている先輩方から後輩へ熱いエール~

### 今成 祥さん(前橋赤十字病院、平成30年度卒)

私は前橋赤十字病院のICUに勤務して3年目になります。高度救命救急センターを要する当院では、昼夜を問わず様々な重症患者が運ばれてきます。現場は緊張感に包まれていますが、海外の大学院進学を目標に、仕事と勉強に日々忙しく過ごしています。

大学生の皆さんは看護師になるという目標以外に何か目標はありますか? 将来の理想像を明確に持つことは、その後の行動指針になります。よく、何かをしたいと思っても何をしたらいいかわからないという言葉が耳にします。そういう方は、とにかく様々な情報に触れましょう。勿体無いのは、何も行動せずに後悔することです。行動できない理由を見つけることは簡単ですが、重要なのはどうすれば行動できるか、その可能性を模索することだと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大が続く状況ですが、行動力があれば、皆さんの将来はきっと皆さんが思っているよりももっと素晴らしいものになるはずです。



### 藤井 綾美さん(福岡赤十字病院、令和元年度卒)

現在、私は手術室で看護師をしています。診療科問わず毎日多くの手術が行われています。予定手術に加えて、急遽手術が必要になることも多々あります。そのため、手術室看護師は患者にとっての最善は何か日々考えながら行動しています。

また、手術室は患者と直接関わる時間が短いため、どれほど患者との信頼関係を築き、個別性のある看護を展開できるかも重要になります。これらの力を十分に養うには多くの時間を要しますが、養っていく現過程で生かされていることの一つに大学生活での経験や学びがあります。

私は大学生活の中でボランティア活動や地域交流など多岐にわたって取り組みました。きつかったことや失敗したこともあります。これらの経験で得た人と人とのつながりや知識、考え方は今の私にとって大きな財産です。そこで私は、興味を持った事柄には積極的に取り組むことをオススメします。挑戦することは勇気がいりますが、新しい発見や成長はとても面白いです。挑戦できる姿勢を自分の中で確立することも今後の強みになると思います。実りの大学生活を送り、自分のなりたい看護師像と一緒に実現させましょう。



### 藤井 美希さん(嘉麻赤十字病院、令和元年度卒)

私は看護師として患者さんやご家族とじっくり向き合い、寄り添う看護を提供したいと思い、こちらの病院に就職して2年目になります。学生のころから興味のある認知症のある患者さんへの看護について悩みながらも先輩方と相談しながら関わらせていただいています。一方で新型コロナウイルスの感染拡大により、ご家族の面会が制限されることでコミュニケーションの機会が少なくなったり、個人防護具の着用といった感染症対策に追われる日々を送っています。

試験や課題等に追われて忙しい学生時代ではありますがコロナ禍のいま、臨床での実習の機会が少なく不安もあると思います。実習でお会いする機会があれば、私自身も一緒に学びながら患者さんと関わったら嬉しいです。ぜひ、学生としての4年間を楽しんでください!





令和3年度入学生(入学式 式典後の記念撮影)

※写真撮影のため、マスクをはずしています。

## TOPICS

### ○新型コロナウイルス感染症拡大防止のための行動指針について

新型コロナウイルス感染症の拡大状況に応じて大学の活動に対し必要な制限の目安についてレベル分けした行動指針を軸とし、感染拡大防止の徹底と学生の学修機会の確保との両立を図るための取組みを、新型コロナウイルス感染症対策本部会議で検討しています。

### ○DX推進計画を策定しました

新型コロナウイルス感染症は、教育研究の分野でもデジタル化を加速させました。本学でも「society5.0」に対応するため、教育・環境の充実と業務改善の2つの柱によるDX(デジタルトランスフォーメーション)推進計画のもとで、ハードとソフトの両面でのデジタル化を推し進めていきます。

### ○自己点検・評価結果を公表しています

大学のさまざまな取組みについて、内部質保証に関する方針及び内部質保証規程に基づいて毎年、自己点検・評価を行っています。自己点検・評価の結果は、報告書にとりまとめてホームページで公表しています。是非、ご覧ください。



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：吉田 歩さん(平成26年度 看護学部卒業生)／福岡県・柏陵高校出身

 **日本赤十字九州国際看護大学**  
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学

〒811-4157 福岡県宗像市アステイ1丁目1番地  
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

### 寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。